

「テイル結果構文」に対応する スペイン語の表現形式

—スペイン語母語話者に対するテイル形指導のために—

清 水 淳

Resultative Aspectual Form *-teiru* and Spanish Aspectual Constructions

— Teaching the Aspectual Form *-teiru*
to Spanish Speaking Learners —

Jun Shimizu

Abstract

In this paper, I focus on the resultative aspect in Japanese and Spanish and attempt a comparison between the aspectual form *-teiru* in Japanese and aspectual forms in Spanish. First, I analyse *estar + participio* (auxiliary verb + past participle) in Spanish, which is regarded as an equivalent to *-teiru*. As *-teiru* and *estar + participio* are constructed under different conditions, other constructions (*tener, haber + participio, estar, haber* etc.) are used to convey the same meaning that is expressed by the *-teiru* form in Japanese. After examining the differences that I clarify above, I analyse four Japanese textbooks that have already been published to illustrate these differences. After careful examination, it is clear the Japanese textbooks fail to incorporate the grammatical differences noted above. In order to improve grammar commentary sections in Japanese textbooks, I conclude this paper by drafting a sample of grammar commentary as an example of how to apply the results of this research to Japanese language teaching.

1 はじめに

本稿の目的は、日本語とスペイン語の両言語で、結果が残存している状況をどのような言語形式を用いて表現するかを対照分析し、その成果を日本語教育における文法解説に応用することである。

スペイン語母語話者を対象とした日本語教科書では、＜結果状態＞のテイルと対応する表現として‘estar + participio’（相助動詞＋過去分詞）が挙げられるのが通例である。しかし、実際には、結果が残存する事態を表現する時、日本語ではテイル形式で表現しても、スペイン語では‘estar + participio’を用いない場合が多く存在する。例えば、「¹⁾（さっきここにあった鍵が）なくなっている」というように日本語ではテイル形式を用いて表現できる事態でも、スペイン語では“(La llave) está perdida.”などとは言わず、単純に“no está”と表現する。つまり、テイル形式の表現の広がりを理解するためには、＜結果状態テイル＞＝‘estar + participio’では不十分であり、スペイン語では‘estar + participio’以外で表現される様々な事態を、日本語ではテイル形式一つで表現可能なのだという認識が必要なのである。

以上のような考えから、本稿では、①結果状態を表すテイル形式と‘estar + participio’の使用範囲の違いを先行研究に求め、②‘estar + participio’以外に、スペイン語ではどのような表現形式が結果状態のテイルの訳語としてありうるかを明らかにし、③上の①②の成果を基に、既存の日本語教科書の問題点を指摘、新たな文法解説案を示す。

2 ＜結果状態＞を表すテイル形式について

本稿の主要な目的は上記①～③であるが、まず、分析の前提となる＜結果状態＞を表すテイルとはどのようなものか、そして、それが現行の日本語教科書においてどのように扱われているかをここで確認しておきたい。

2. 1 テイル結果構文について

テイル形式が表す意味は様々であるが、本稿で対象とするのは、次のような、主体が受けた行為から生じた変化、あるいは、主体が自ら行った行為の結果が残存していることを表す用法である。

- (1) 窓ガラスが粉々に割れている。
- (2) 英語の勉強のために、兄はアメリカに行っている。

(1) は、外から受けた(「割る」という)行為によって、主体(窓ガラス)に生じた(「割れた」という)変化が残っていることを表している。(2) は、主体(兄)が自ら行った移動行為の結果が引き続き残っていることを表している。日本語教育では、一般的に、このようなテイル形式の表す意味・用法を<結果状態><結果残存>などと呼ぶが、3. 1 節で詳しく見る高垣の研究では「テイル結果構文」と呼んでいる。用語の統一という観点で、本稿でも高垣に倣い、テイル形式が<結果状態>を表す場合を「テイル結果構文」と呼び、分析を進める。

2. 2 スペイン語母語話者向け日本語教科書におけるテイル結果構文

スペイン語母語話者向け日本語教科書の文法解説において、通常、テイル結果構文の訳語とされるのは ‘estar + participio’ である。以下、4 冊のスペイン語母語話者向けの日本語教科書でそのことを確認する。

- ① *curso intensivo de JAPONÉS para hispanohablantes primera parte y segunda parte*, El Colegio de México, 1982, Mexico.
- ② 『みんなの日本語 初級 I・II 翻訳・文法解説スペイン語版』 スリーエーネットワーク、1999。
- ③ *NIHONGO Japonés para hispanohablantes Bunpō*, Herder, 2000, Spain.
- ④ *Manual de Japonés Básico*, 中沢洋子、ピアソン・エデュケーション、2008。

(発行年度順。以下、①を『JAPONÉS』、②を『みんな』、③を『NIHONGO』、④を『Manual』と略す。)

『JAPONÉS』(p.154)、『NIHONGO』(p.170)では、テイル結果構文の対応語として‘estar + participio’が明記されている。『みんなⅡ』(p.26)、『Manual』(pp.80-89)では、‘estar + participio’が対応語として明記はされてないものの、例文は、‘estar + participio’で訳される場合がほとんどである。([NIHONGO』(p.170)では、テイル結果構文ときれいに対応しないスペイン語の例が取り上げられており、注目すべき点であるが、これについては、4.1節にて後述する)。

しかし、‘estar + participio’は、テイル結果構文が表しうる事態の一部しか表現できないことが、先行研究で明らかになっており、唯一の対応物として導入するには問題がある。次章で、そのことについて詳しく見る。

3 テイル結果構文に対応するスペイン語のアスペクト形式

ここでは、テイル結果構文と‘estar + participio’について詳細に分析した高垣の一連の研究から、‘estar + participio’がテイル結果構文の唯一の対応物ではないことを確認する。さらに、テイル結果構文に対応する‘estar + participio’以外の表現形式を筆者の調査から明らかにする。

3.1 ‘estar 結果構文’の形成要件

スペイン語の‘estar + participio’の構文を詳細に分析したものとして、高垣(1999, 2000a, 2005)の一連の研究がある。以下にその概要をまとめる。なお、高垣では Vendler (1967)の動詞分類を分析の基本にすえているため、まずは、その動詞分類を概観する必要がある。

3. 1. 1 Vendler (1967) の動詞分類

英語学において、Vendler (1967) が提案した動詞 4 分類を概観する。それは、現在、最も広く援用されている分類であると思われる。⁴⁾ 以下は、英語によるその類例である。

- a. 状態動詞 (states) : know, believe, have, desire, love
- b. 活動動詞 (activities) : run, walk, swim, push a cart, drive a car
- c. 到達動詞 (achievements) : recognize, spot, find, lose, reach, die
- d. 達成動詞 (accomplishments) : paint a picture, make a chair, push a cart to the supermarket, recover from illness

(語例は、影山 (1996: 41) による。)

動詞は〔状態性〕を持つかどうかという基準で大きく二つに分けられる。まず、〔状態性〕を持つ動詞として a. 状態動詞が取り出される。次に、〔状態性〕のない、つまり動的な動詞に振り分けられた動詞を、〔限界性〕という基準で二分する。〔限界性〕とは、その行為全体に必然的な終了限界点が含まれているかという基準である。例えば、‘run’「走る」という行為は動的であるが、その動作自体に何ら必然的な終わりは含まれていない。一度その行為を始めてしまえば、どこでその動作を終えても「走った」と言える。つまり、‘run’「走る」自体に、なんの終了限界点も定められていないのである。反対に、‘run a mile’「1 マイル走る」では、1 マイル走らなければ、その行為は成立したことにはならず、「1 マイル走った」と言うためには、走り始めて 1 マイルの地点を通過しなければならない。よって、「1 マイル走る」は、必然的な終了限界点が含まれている事象である。このように、動的で、非限界的な動詞を b. 活動動詞として取り出す。単に ‘run’「走る」は、活動動詞に分類され、‘run a mile’「1 マイル走る」という動詞句は、次の分類基準にもち越される。3 番目に、〔瞬間性〕という基準を用いて、動的で限界性のある動詞をさらに二分する。〔瞬間性〕とは、その動作が時間幅を持つ動作か、一瞬のうちに

終わる動作かという基準である。例えば、‘win the race’「競争に勝つ」は、最終的な目標（勝利）に至らなければ、その行為が成立したことにならないという意味で〔限界性〕があり、その目標（勝利）の実現は、瞬間的に成立する。このように、動性、限界性、瞬間性を持つ動詞は、到達動詞（achievement）に分類される。

一方、先に見た ‘run a mile’「1 マイル走る」は、最終的な目標として「1 マイルの距離の走破」があり（限界性があり）、その行為の実現にはある程度の時間幅（持続性）が必要である。このように、状態性、限界性、持続性の持つ動詞は、達成動詞（accomplishment）に分類される。以上の過程を図で示すと、次頁のようになる。

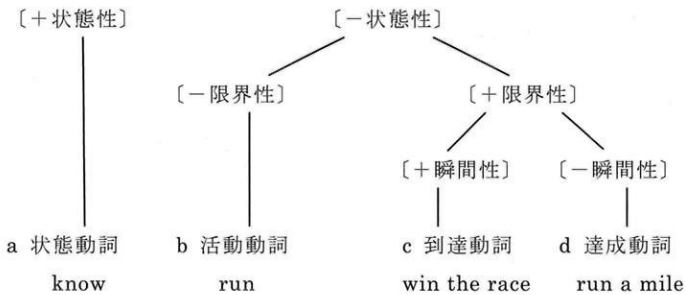


図1 Vendler (1967) の動詞分類過程

3. 1. 2 ‘estar 結果構文’ の分析：高垣の研究

スペイン語において、ある動作、作用の結果が残存していることを表そうとする場合の一つの形式に、‘estar + participio’（相助動詞＋過去分詞）がある。受身文の一種とされるが、‘ser’ を用いた受動文とは異なり、通常 ‘por ～行為者’（～によって）をしたがえないこと、場面への時間的限定性が強いことから、＜結果状態＞の構文とされる。以下、高垣の用語をに倣い ‘estar 結果構文’ と呼ぶ。

高垣（1999）は、estar 結果構文は以下の要件のもとで形成されるとする。

- (3) a. ‘estar 結果構文’ は完了性の動詞によって形成される。
 b. ‘estar 結果構文’ は変化を含意する動詞によって形成される。

(高垣 1999 : 140 における形成要件)

(3a) の完了性とは、〔限界性〕である。よって、この時点で、〔限界性〕を含まない状態動詞、活動動詞は形成資格を失う。

- ・ *El español está hablado.
- ・ *El asunto ya está sabida. (高垣 *ibid.* : 140)

また、活動動詞が「一定の直接目的語を伴うことにより、動詞句全体として限界性アспектをもつにいたる」ものを達成化動詞とするが、そのように〔限界性〕を付与されても、(3b) の要件を満たさなければ、estar 結果構文を形成しない。到達動詞も限界性動詞ではあるが、「それに先行するはたらきかけもなく、事象の生起後、対象に対していかなる変化をきたすこともない」(高垣 2005 : 107) ため、これも (3b) の要件を満たせず、estar 結果構文を形成しない。

- (4) *La sonata está interpretada. (達成化動詞)
 (5) *El río está cruzado. (到達動詞) (高垣 *ibid.* : 107, Marín 2004 より)

以上から、(3ab) の形成要件により、達成動詞（一定の時間幅を持って、その対象に状態変化や位置変化を及ぼす動詞）のみが、estar 結果構文を形成すると（暫定的に）言うことができる。

しかし、上で不適格となった達成化動詞と到達動詞の例も、ある特別な状況設定を行えば、十分に適格になるとしている。「特定の状況」とは、「先行局面を顕在化するような状況、すなわち、持続過程 P（および、その反映としての結果状態 E）の下位事象が意味的に補完され、移行事象を構成するようになる場合」である。例で確認する。

- (6) Esta sonata ya está interpretada. (高垣 *ibid.* : 110)

まずは、達成化動詞から説明する。(4)では不適格であった例も、「コンサートのプログラムで、予定されている曲目の中で、当該のソナタが終了後、関係者の間で、終了した事実を確認する」という状況では、(6)が適格になる。「プログラムの流れ」が一種の過程性を、「次の曲目へ移る」ことが、当該のソナタが終了した後での結果性を補完する。それにより、この構文が可能になるということである。‘ya’ (もう)のように、事象の展開性を表示するような副詞の付加は、なおいっそうこの文を適格なものにするという。

次に、到達動詞の例を見る。

(7) ¡ Comandante, el río ya está cruzado!

(8) a. ??La cartera está encontrada.

b. El tesoro ya está encontrado.

(9) a. ??La cartera está perdida.

b. La memoria del nefasto crimen ya está perdida en el pueblo.

(高垣 *ibid.* : 111-112)

(5)では不適格であったが、(7)のように、計画的な作戦行動の一部として目標が達成される状況が想定されると、適格となる。また、(8a) (9a)では不自然に感じられる文も、(8b) (9b)となれば自然となる。それは、各 (b)においては、その事象の達成に向けた意図的な持続行為があったことが前提とされるからだとしている。(8a) (9a)よりも (8b) (9b)の方が、不特定多数による ‘encontrar’ (発見する)、‘perder’ (なくなる)の実現に向けた意図的持続性が強く感じられるというわけである。

以上、高垣の分析の要点は、estar 結果構文は、完了性で変化を含意する動詞 (達成動詞) により形成されるのが基本であるが、それに外れる場合でも、当該の事象の達成に向けた意図的持続性が想定されれば、過程性が補完され、estar 結果構文を形成するようになる、ということである。「意図的持続性」を「はたらきかけ」ということばに置き換えると、estar

結果構文は、〔変化〕と、その〔変化〕を与えようとする「はたらきかけ」を事象構造として持つ動詞（句）から形成されることができよう。以上の関係性を図式化すれば以下のようになる。

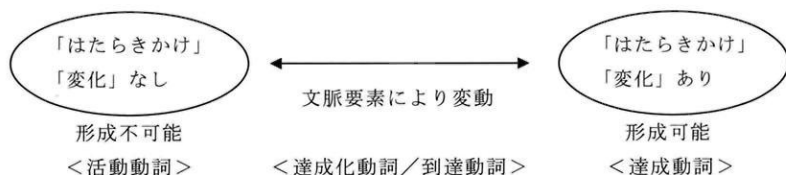


図2 ‘estar 結果構文’ の形成

活動動詞と達成動詞は、estar 結果構文の形成の可否からすると対極に位置づけるものである。活動動詞は、いかなる場合も estar 結果構文を形成しない。反対に達成動詞は、estar 結果構文を形成する典型的なものである。両動詞の中間に位置づく達成化動詞（項や副詞要素により〔限界性〕を帯びるもの）と到達動詞は、文脈次第、つまり「はたらきかけ」と「変化」が補完されるような読みが可能な場合にのみ estar 結果構文を形成するようになるものである。いずれにせよ、estar 結果構文には、「はたらきかけ」と「変化」が重要な要件である。

しかし、日本語のテイル結果構文の場合には、達成動詞はもちろん、達成化動詞でも到達動詞であってもよい。以下に、例を挙げる。

- (10) ‘quitarse la chamarra’（上着を脱ぐ）
→ *Está quitado la chamarra.（上着を脱いでいる。）
- (11) ‘un visitante importante venir’（大事なお客さんが来る）
→ Un visitante importante *está venido.（大事なお客さんが来ている。）
- (12) ‘perder la llave’（鍵をなくす）
→ *La llave está perdida.（鍵がなくなっている。）

(10) (11) のような動詞は変化を含んでいる。しかし、それは対象への

「はたらきかけ」によって起こった変化ではない。変化するのは主体自らである。また、(12)のような消失を表す動詞も無意志的であり、対象への積極的な「はたらきかけ」とは考えられない⁵⁾。よって、これらはすべて *estar* 結果構文を形成しない。しかし、日本語訳の方は、何ら特殊な訳ではなく、ごく自然なテイル結果構文を実現している。以上の観察により、*estar* 結果構文とテイル結果構文の差異が明らかとなった。

以上のように、日本語ではテイル結果構文で表す事象であっても、一般的にその訳語とされる '*estar + participio*' は、その形成要件にかなりの制限がある。そこで、それが用いられずにほかの形式で表現される場合が予想される。次節にて、どのような表現形式のバリエーションがありうるのかを見る。

3. 2 テイル結果構文に対応するその他のスペイン語の表現形式

前節で見たように、*estar* 結果構文は、テイル結果構文が表しうる事態の一部分しか表現できず、決して唯一の対応物ではない。テイル結果構文をスペイン語に翻訳しようとすれば、'*estar + participio*' 以外の様々な訳語が必要となる。この節では、テイル結果構文の対応語として、*estar* 結果構文以外に、どのような可能性が考えられるかを明らかにする。

以下を参照されたい。これは、テイル結果構文をスペイン語で表そうとした場合に、どのようなバリエーションがありうるかを抽出しようとしたアンケートである。方法としては、通常日本語でテイル結果構文が使用されるような文脈を設定し、その部分に筆者自身が '*estar + participio*' を直訳的にあてた。その箇所をスペイン語ネイティブに訂正を依頼したものである（メキシコ国立工科大学外国語教育センター日本語科日本語教師 Nadia Ramos Cristina 氏に訂正を依頼した。日本語訳を見ながら、その状況を表現するのにふさわしいスペイン語に修正する作業となる。波線部が修正された訳語である）。

<添削調査の抜粋>

1. A : Hoy María se ve linda. (今日、マリアさん、かわいいですね。
 B : Si verdad? Está puesta una blusa bonita. → tiene puesta
 (そうですね。きれいなブラウスを着ています。)
2. Aunque estamos en invierno, hace calor en esta sala. Todos están quitados la chamarra. → se han quitado
 (今、冬なのに、この部屋は暑い。みんな上着を脱いでいます。)
3. (A hace a B una llamada. Pero en casa de B ha llegado un visitante un tiene que atenderlo)
 A : ¿Bueno? Voy a ver el partido de fútbol con Carlos. ¿quieres ir con nosotros?
 (もしもし、今からカルロスとサッカーの試合を見に行くんだけど、一緒に行かない?)
 B : Me encantaria, pero no puedo ir porque está venido un visitante importante y tengo que atenderlo. Hoy no puedo ir a ningún lado. → ha venido / vino
 (うん…、でも行けない。今、大事なお客さんがうちに来ているから、相手しなくちゃいけないんだ…。今日はどこにも行けないよ。)
4. A : ¿Dónde está Juan? (フアンはどこ?)
 B : Está bajado al sótano. → Está en / Ha bajado / Bajó
 (今、地下に降りています。)
5. (Situación: Actualmente el hermano de B está en Estados Unidos.)
 A : ¿En qué trabaja tu hermano?
 (お兄さんは何の仕事をしていますか?)
 B : Todavía es estudiante. Está ido a Estados Unidos para estudiar inglés.
 → Ha ido / Se fué
 (まだ学生ですよ。英語の勉強をしに、アメリカに行っているんです。)
6. A : Que extraño… (変だな…。)
 B : ¿Qué pasó? (どうしたの?)
 A : Hace rato dejé la llave aquí, pero está perdida… → no está
 (さっき、ここに鍵を置いたんだけどなくなっている…。)

‘estar + participio’ を用いて故意に間違えた箇所は、‘tener + participio’ (結果状態)、‘haber + participio’ (完了)、点過去形、‘estar’

(特定物の存在) のような訳語に訂正されていることがわかる。

また、上田の二言語コーパスからは以下のような対訳例も抽出された。

- ・ Hoy hay niebla. (今日は霧が出ている。)
- ・ Hay dos estudiantes nuevos en la clase de hoy.
(今日の授業には新しい生徒が二人来ています。)
- ・ Hay un pelo en la sopa. (スープに毛が1本入ってる。)
- ・ En la cesta había peras y entremedias ciruelas.
(かごの中にはナシとその間にスモモが入っていた。)

(上田コーパス)

以上、上田のコーパスからは、テイル結果構文の訳として ‘haber’ (不特定物の存在) も使用されることがわかる。

このように、テイル結果構文の対応形式としては、‘estar + participio’ のほか、‘tener + participio’、‘haber + participio’、点過去形、‘estar’ ‘haber’ も考えられるわけである。よって、日本語で「大事なお客さんがうちに来ている」「ブラウスを着ている」「鍵がなくなっている」などの言い方は、機械的な翻訳作業では、理解、あるいはその運用が難しいのではないと思われる。スペイン語からの直訳で考えるのであれば、「大事なお客さんが来た」「ブラウスを着た」「鍵がない」などという文を生成するのが自然な流れだからである。

以上より、テイル結果構文 = ‘estar+ participio’ という説明を強調しすぎる、あるいは、その説明のみで済ませてしまうのでは不十分ではないかと思われる。このような形式的違いは、明示的に説明されるべきポイントであり、また、例文や練習問題にも、これらの相違を鑑みた提示の仕方が要求されるだろう。

4 文法解説

ここでは、既存の教科書の解説部分を見る。そこから見える問題点を指

摘し、前章までの分析結果を反映するかたちでの文法解説案を示す。

4. 1 <結果状態>の解説部分

以下、それぞれの教科書の<結果状態>テイル形の文法解説部分を抜粋する。

『JAPONÉS』(第11課) p.154

1. **V (て) います** (2) 'estar + verbo (participio)'

En la lección 8 se vio la construcción v (て) います que expresa una acción en curso. Esta construcción se utiliza también para expresar el resultado de una acción, y equivale a la construcción española 'estar + participio'. En este segundo caso los verbos que se emplean indican una acción instantánea.

- | | |
|---------------|----------------------------------|
| ej. 電気がついてます。 | La luz está prendida. |
| 電気がきえています。 | La luz está apagada. |
| ドアがあいてます。 | La puerta está abierta. |
| かぎがこわれています。 | La llave está rota/descompuesta. |

(後略)

『みんなⅡ』(第29課) p.26

1. **V forma- ています**

V forma- ています expresa el estado que resulta como una consecuencia de la acción expresada por el verbo.

1) **Sが V forma- ています**

- | | |
|------------|---------------------------|
| ①窓が割れています。 | La ventana está quebrada. |
| ②電気がついてます。 | La luz está encendida. |

Como en el ejemplo anterior, cuando el hablante describe el estado que ve frente a sí de la manera que lo ve, el sujeto de la acción se indica mediante la partícula が. El sujeto ① muestra que "la ventana fue quebrada en el pasado y que la consecuencia permanece (=está quebrada)." Los verbos que se usan en esta expresión son verbos intransitivos y la mayoría de ellos indican un acto o acción instantánea. Ejemplos de tales verbos incluyen a こわれます, きえます, あきます, こみます, etc.

(中略)

Cuando se describen estados en el pasado, se usa V forma- っていました。

③けさは 道が 込んでいました。 Esta mañana la calle estaba congestionada.

『NIHONGO』 p.170

Con verbos puntuales, La forma-TE + IRU expresa el estado resultante de una acción. En español equivaldría a verbo estar + participio. (Véase lista de verbos puntuales en TEMA 8. CLASIFICACIÓN DE LOS VERBOS.)

{ 鎌田さんは結婚しています。
Kamada-san *está casado/a*.
{ 窓が開いています。
La ventana *está abierta*.

(ローマ字表記は省略してある。)

『Manual』では、80-81 頁で “El resultado de una acción consumada” という文法説明のみで、「あには もう けっこんして います。」 “Mi hermano mayor ya está casado.” という例のみを提示している。以上が4冊の教科書の＜結果状態＞の解説部分である。

まず、＜結果状態＞の意味説明自体には、ほとんど違いがないと見てよい。ポイントは、3.1 節で見た、日本語とスペイン語の＜結果状態＞における成立要件に関する言及が見られるか否かである。

『NIHONGO』において、注目すべき説明がなされている。上記抜粋部分に続き、『NIHONGO』では、次のような記述がある。

『NIHONGO』 p.170

Con verbos de movimiento como *IKU* (ir), *KURU* (venir), *KAERU* (regresar), etc., la forma -TE + IRU indica estado. *ITTE IRU*, por ejemplo, no significa *estar yendo a un lugar*, sino *estar en él*.

(「行く」「来る」「帰る」などの移動動詞のテイル形は状態を表す。例えば、「行っている」は、ある場所へ向かっていることを表すのではなく、その場所にいるということを表している。)

Iku : ir	ir	itte iru :	estar (alli)
Kuru :	venir	kite iru :	estar (aquí)
Kaeru :	regresar	kaette iru :	estar de vuelta
Dekakeru :	salir	dekakete iru :	estar fuera

(日本語訳は筆者)

この説明部分では、移動動詞に関して日本語では普通にテイル形式で〈結果状態〉を表すことがあるのに対し、スペイン語では他の表現形式(主に特定物の存在を表す 'estar' 「いる」)を用いて表現することが明記されている。これは、日本語とスペイン語との表現形式の違いに着目したものであり、それを明示的に文法説明に反映していると言える。

しかし、3.1節でも明らかなように、このような違いを見せるのは移動動詞 (verbos de movimiento) だけではない。対象への積極的な変化をその事象構造にもたない動詞からは、estar 結果構文が形成されないわけであり、その部分が、さらに体系的に、そして明示的に説明されるべきではないだろうか。

4. 2 文法解説案

以下に、これまでの対照分析を反映した文法解説案を示す。(太字は、スペイン語表記の部分であることを表す。また、便宜上、ルビなどの配慮は省略する)。

「動作が終わって、変化の結果の状態が続いていること」を表す場合
次の例を見てください。

A : お兄さんのお仕事は？

B : まだ就職していないんですよ。

A : えっ？じゃあ、何をしているんですか？

B : 英語の勉強をしにアメリカへ行っているんです。

A : ¿En qué trabaja tu hermano?

B : Todavía no trabaja.

A : ¿De verdad? Entonces, ¿qué hace?

B : Está en Estados Unidos para estudiar inglés.

どうしてテイル形式が使われているのでしょうか。それは、日本語では、「行く」（日本を出てアメリカに着いた）という行為の結果が継続していると考えるので、「行っている」となるのです。スペイン語では、このような出来事を 'estar + participio' では表現できず、他の表現方法（単純過去形、現在完了形、'estar' etc.）を使用します。他にもこのような例はあります。

①移動の動詞：「行く」「来る」「帰る」「出かける」「着く」「上がる」「降りる」など。

例 1（会社で）

A : 今晚、一杯、どう？金曜日だし…。

B : すみません。今、田舎から家内の両親が来てるんですよ。だから、早く帰らないと…。

A : あー、そう。じゃ、また今度。

(en la oficina)

A : ¿Qué te parece si vamos a tomar una copa esta noche, es viernes...

B : Lo siento. Mis suegros vinieron desde su pueblo natal y por eso tengo que volver a casa lo antes posible.

A : Ay, ya veo. Será en la otra ocasión.

例 2（駅のホームで）：あ！子どもが線路に降りてる！

(en el andén) ¡Mira! Un muchacho bajó a las vías..

②「着る」「脱ぐ」など再帰動詞

例 今、冬なのに、この部屋は暑い。みんな上着を脱いでいます。

Aunque estamos en el invierno, hace calor en esta sala. Todos se han quitado la chamarra.

③「なくなる」「忘れる」などの無意志的な表現

例 1 A : 変だな…。

B : どうしたんですか？

A : ここにあった財布がなくなってるんです。

A : ¡Que extraño!

B : ¿Qué pasó?

A : La cartera que estuvo aquí no está.

例 2 現代人は、忙しい生活の中で大切なことを忘れてる。

Los humanos de estos tiempos han olvidado las cosas importantes en esta visda acelerada.

ここでは、スペイン語からの単純な翻訳作業では生成しにくいと思われる日本語のテイル結果構文を重点的に取り上げてある。例文を通して、スペイン語の *estar* 結果構文では表さないものでも、日本語の場合は、テイル結果構文で表現することを重点的に学ぶ構成となっている。

5 まとめ

本稿では、テイル結果構文と ‘*estar + participio*’ の成立条件には差異があり、テイル結果構文で表されるような事態をスペイン語で言語化する場合、様々な表現形式が用いられることを見た。その観察から、従来の文法解説に見られるように、テイル結果構文の対応形式として ‘*estar + participio*’ のみを強調することはできないことを主張した。さらに、その対照分析を反映したかたちでの文法解説案を示した。

このような文法解説の充実を述べる場合、一方では、難しい文法説明は学習者の混乱を招くという反論もある。語学教師という立場上、それも理解できる。確かに初級の段階から、細かい文法解説を完璧に施す必要はないと思う。そういった意味では、本研究の意義は、中級以上のレベルの学習者、あるいは、日本語を専門に学習している学習者向けかもしれない。しかし、いずれにせよ、正確に、かつ生産的に文をアウトプットし、表現力を豊かにしようという場合には、やはり文法的知識がその助けとなる。言語学レベルの研究成果が、更なる文法解説の充実に果たす役割は大きいと考える。

注

- 1) 日本語学では、「車が走っている」「財布が落ちている」など、動詞のテ形に状態動詞「いる」をつけて＜進行＞や＜結果状態＞などの意味を表す形式を、通例「テイル」と呼び、一つの文型として扱う。

- 2) テイル形式の意味には、最も基本的なく進行><結果状態>を中心にして、<反復><パーフェクト><単なる状態>などの派生的意味(工藤 1995)がある。
- 3) 教科書の選定にあたり、初級学習項目を網羅している、かつ、スペイン語での解説がなされているものを選んだ。2000 年度以前のものに関しては、大倉(2000)が、教科書選定に役立った。
- 4) スペイン語学の分野でも、De Miguel (1999: 3030) は、Vendler の用いた「持続性の基準」‘el parámetro de la duración’ が最大の功績とし、その有用性の高さを評価している。
- 5) 高垣(2000a: 74)では、「発見、消失、認知、忘却、獲得」のような動詞が挙げられている。
‘encontrar’ (見つける)、『olvidar’ (忘れる)、『reconocer’ (気づく)、『conseguir’ (得る) など。
これらは、「動作主をもたないで、経験者を外項とする」ために、意図性のないものである。つまり、「はたらきかけ」は含まず、estar 結果構文は形成しない。
- 6) スペイン語文例の収集に際し、上田博人ホームページ内「言語情報解析」(<http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~ueda/kaiseki/index.php>) で公開されている、「二言語コーパス」を活用した。Rubio Carlos、上田博人編『研究社新スペイン語辞典』(研究社、1992)の例文を収集、作成された日西語対訳コーパスである。

参考文献

- 大倉美和子(2000)「スペイン語話者のための日本語教材概説」『日本語と外国語との対照研究VI 日本語とスペイン語(3)』国立国語研究所、くろしお出版
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 高垣敏博(1999)「語彙アスペクトとスペイン語の<estar+ 過去分詞>構文」『東京外国語大学百周年記念論文集』pp.137-168 東京外国語大学
- (2000a)「<estar+ 過去分詞>と<テイル文>——結果相解釈をめぐる」『日本語と外国語との対照研究VI 日本語とスペイン語(3)』pp.67-93 国立国語研究所、くろしお出版
- (2000b)「語彙アスペクトとスペイン語の統語現象 Gramática Descriptiva (1999) 第46章 “El Aspecto Léxico” (Elena de Miguel) より」『言語研究X』pp.79-89 東京外国語大学

- (2005) 「< estar+ 過去分詞 > 構文(1)」『スペイン語学研究 20』 pp.105-121
東京スペイン語学研究会
- 中沢洋子 (2008) *Manual de Japonés Básico*、ピアソン・エデュケーション
『みんなの日本語初級 I・II 翻訳・文法解説スペイン語版』(1999) スリーエー
ネットワーク
- De Miguel, Elena (1999) “El aspecto léxico”, *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, cap.46. pp. 2977-3060. Espasa Caple.
- Junichi Matsuura and Lourdes Porta Fuentes (2000), *Japonés para hispanohablantes, Kyōkasho I・II, Renshū-chō I・II, Bonpoo*, Herder
- Miwako Okura, Ryuji Oki and Yoshie Awaiihara (1982), *Curso intensivo de JAPONÉS para hispanohablantes (primera parte, segunda parte)*, EL COLEGIO DE MÉXICO
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.